

郷土館発

土 雛

郷土館の収蔵資料の中でも他に類を見ない程豊富なものに土雛がある。約九百体、年号や作者が明記されているものは少なく、断定は難しいが、刻まれた略号などで分かるものには、旧棚尾町、大浜町、旭村(いずれも現碧南市)などで活躍していた作者のものが多い。天神雛などでは稀に国府や豊橋の作者名が分かるものがある。しかし、様々な種類の雛のほとんどが、西三河の碧南市並びにその近辺で作られたものようである。

西三河地域の土雛生産は江戸時代末期に始まり、明治時代に最盛期を迎えた。それも、次第に衣装をまとった人形にとつて代われ、太平洋戦争頃を境に衰微した。郷土館の雛は平成のものまでであるが、焼成方法や塗料が変化している。

奥三河地方には、二月ごろになると、ひな様売りが天秤棒を担いで回ってきた。一荷は四十体ほどだったようである。



日章旗を持つ親子

買い求めた価格がメモされているものが時々ある。明治三十七年購入の内裏雛には「対三十銭」明治四十五年購入の花魁をモチーフとした雛には「金三十銭買入」大正十一年の恵比寿大黒には「二人シテ金四拾五銭」とある。

明治四十年前後の物価を調べると、米一升が十六、七銭であったという。土雛の三、四十銭など大したことではないと思う人がいるかもしれない。



天神

当地域での現金収入の代表的なものに養蚕があるが、郡内で講習会が開かれ養蚕が一般に拡大したのは明治から大正にかけてである。だが、大正後半に得られた収入は、昭和になると半額以下に落ち込み、現金収入はなかなか安定しなかった。ある程度の収入が得られたのはごく限られた期間だったのである。生活の必要上のもの以外にお金を使うことは出来るだけ減らしたいというより、出せない時代であり、地域であった。

土雛は、山村の貧しい暮らしの中で、子や孫に贈った最大の



行燈持ち娘

心づくしの品である。家族はそれを大切に扱い、保存したため、産地から遠く離れたこの地方に多く残されているのであろう。

天神雛の底に「昭和参拾壹年旧三月〇〇初節句記念」などと、男の子の初節句を祝うためのものであることが分かる記述のあるものがある。また、良い旦那様やお嫁さんに巡り会えるように願う、男の子には女性の雛を、女の子には武者等の雛を贈った地域もあるという。三月の節句といえば、今では女の子のお祭りということになってきているが、男女区別なく子どもの誕生を祝い、幸福を願う周囲の人々の思いが重ねられているようである。

内裏雛やかわいい娘、美しい女性ばかりではなく、勇壮な歌舞伎ものや武者もの、高砂や恵比寿・大黒などの縁起もの、時代によつては軍人、天皇など多岐にわたっている。実にモチーフの種類は百種類以上に及び、それぞれに子供への思いが重ねられているのである。

(奥三河郷土館長

平松 博久)